

人蔵作品をこれだけ集中的に目にする機会は、おそらくもはやないだろう。日本向けには手抜き工事の前歴あるロナルド・ピックウァンスの全力投球。初期の風景や静物から、テヘラン蔵『日本の版画のある静物』。サン・パウロ蔵『ゴルゴタの近くの自画像』まで。ゴーギャンのタヒチ像に、男の欲望の身勝手な合理化や植民地主義の反映を断罪する立場もある。だが、マネの『オランピア』の翻案たる『死霊が見ている』などは、マルセル・モースの説く無償の供物、ジョルジュ・パタイユの言う交換価値を越えた聖なるポトラッチに対する、絵画的な応答では？ そんな説のほうが、ゴーギャンのキリスト教倫理への反逆にも合致する。パリ日本文化会館では、画期的な『縄文』展。経験皆無だった館員諸氏の、数年来の研練。国際的な制約の齟齬を乗り越えての実現。いまや国際プロといふべきその実力には心底脱帽。レヴィ・ストロースの序文もさらなり。戻ったニュー・ヨークのブルックリン美術館では『服飾のジャポニスム』も開幕。ワシントンでは『ファン・ゴッホ』に並び大規模な『江戸展』も。

感謝祭にごった返すポストン美術館再訪。マネ展の脇に至福ありき。がらがらの隣室には、ターナーの『奴隸船』。画面右下には大口あけて獲物目がけて突進する馴怪な顔の大魚ふたつ。読者はご存じだろうか？ その横には『アルプスの瀑布』を描いた、これまたターナー中期の傑作。そのまた隣室にはエドゥアール・マネが途中放棄した『皇帝マクシミリアンの処刑』。ロンドンやマンハイムにある完成作より、はるかに生々しい一気呵成の筆遣い。初期の『桜ん坊を売る女』や、駄作というほかない『室内楽』が、その周辺に並ぶポストン趣味も愉快。そのまた隣室には、数年前の『ゴーギャン大回顧展』にも、保存状態ゆえに出品されなかった『我らいずこより来たるか、我ら何者なるや、我らいずこへと行くか』や木彫の傑作と並んで、マネの『ラ・ジャポネーズ』や『ルー・アン大聖堂・朝の印象』など。特別展などものかはの尻巻。

連載④
オーールド・ファッション
ニューヨーク通信4・企画特別展の余白に至福あり

欧米展覧会事情

秋雨のニュー・ヨーク。通り過ぎるご婦人の傘には、マネの睡蓮。思えばハーヴァード大学、ライシャワー研究所で講演を頼まれた機会(ハル夫人死去翌週)に、ボストン美術館の鳴り物企画、「20世紀のマネ」展を見たのは10月初頭のこと。どんな観衆がどんな反応を示すのかを観察した、といったほうがより正確だが。開館時間直後に入館。貰えた入場券は、午後2時半入場(前売り券も時刻指定)。だが東洋部の館員に会い、館内を散策し、書籍部で山なす新刊の品定めなどしていると、もう時間不足(ちなみに批評の半数はジェニファー・ロバートソン話題の新作『タカラヅカ』など、ジェンダー物が圧倒)。マネ展など善男善女の知的巡礼の商業搾取、という批判も響しい。だが、つい数年前まで開店休業の部署ばかりだったボストン美術館は、観客動員策の成功で、今や完全にハイ・ソンのメッカとして蘇生していた。

ペーパー・バック版でも30ドル近くする三百頁のカタログ。飛ぶ売れ行き。今まで評判がイマイチだったマネ晩年を再評価しようという意気込みも明らか。ジョン・ハウスが19世紀のパノラマと結び付けて睡蓮の連作を論じ、いまや世界的マネ学者に成長したポール・タッカーは、長大な主論文(注が三百近い)で、庭師マネの活動を20世紀初頭の芸術運動との関連で詳細に描きだす。これを受けて、ロミー・ゴランはフランス20世紀壁画装飾の文脈にマネ晩年のオランジュリーの連作を再設定し、マイケル・レアは50年代ニュー・ヨークの抽象表現主義の先駆としてのマネの役割を再評価する(ちなみに以上で百頁以上)。

最後の展示室には、マネ没後、今日まで公開されなかった長大な抽象画然たる一幅も。ジヴェルニーのマネの旧邸を修復したのもアメリカ資本。団体ツアー企画込みの商魂には感心。本展も、ボストンの後はパリ素通りでロンドンに移動。×××棧敷の仏蘭西人たちの憤怒/唾罵や如何？

10月中旬は欧州出張。スイスはマルティニーのジャナタ財団で、充実した『ゴーギャン』展に接する。個

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美